HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもに関わるボランティアの裁量と経験
Author(s)	野澤, 智媛
Citation	教育福祉研究, 23, 1-12
Issue Date	2019-02-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72513
Type	departmental bulletin paper
File Information	010-0919-6226-23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.23 2019]
[教育福祉研究　第23号　2019]

子どもに関わるボランティアの裁量と経験

野　澤　智　媛

1．本研究の課題

近年子どもたちに対するボランティア活動に注目が集まっている。その背景には子どもたちの直面している困難の実態が明らかとなり、社会的関心が高まっている動向がある。子どもたちの語りを元に困難を紐解いた諸研究（小西 2003、大澤 2008、林 2016、等）から明らかとなったのは、子どもたちが困難を抱えていたとしてもスティグマを感じ困難の表出をためらっていること、また困難そのものを解決できるものとして認識していないことであった。すなわち、例え困難に対する為す術があったとしても、それら子どもたちにとって頼ることができるものとして機能しておらず、同時に状況の打開に向け行動を起こすという選択肢自体が奪われていた。

このような現状を踏まえ、先行研究において示唆されているのは子どもたちに関わる他者の重要性である。その人物像として、藤村（2013：47）は子どもたちが学校教師を悩みや相談を「聞いてくれる」存在として挙げ、「話しをしたことで悩みが解決する場合と、「聞いてくれた」ことだけで助けとなると意識される場合がある」と考察している。確かに制度に基づき関わり方が定められ行われる支援も重要である。しかし先行研究で述べられていたように、子どもたちは自身の困難に対しスティグマを感じ、また困難そのものを解決できるものとして認識していないことが想定される。だからこそ、子どもたちの困難や状況に柔軟に合わせることができる、関わり方そのものを個人の裁量に委ねた支援が重要なのではないか。そして、子どもたちに関わるボランティア活動の増加の背景には、この柔軟な関わりの担い手としてのボランティアに対する期待感があるように思う。

しかし、このボランティア個人に関わり方の裁量を委ねた活動は、関わる子どもたちの直面している課題の深刻さにより「どの程度関わるべきか」という不安や悩み、結果としてバーンアウトが相対的に発生しやすい点に留意すべきである。この不安や悩みをボランティアの個人的なものとして放置しては、社会として活動の需要が高まったとしても広まらないだろう。

では、子どもたちに対する関わり方の裁量を委ねられたボランティア個人が直面する不安や悩みに対し、第三者がアプローチできることはないだろうか。これに対しイギリスのユースワーカーの制度化における歴史的展開から示唆を得ることができる。有志で活動していたユースワーカーも子どもたちへの関わり方について不安を抱えていたという。その打開に向け、養成カリキュラムとして組まれ重視されたのは「振り返り」の場であった。ユースワーカーは自身の活動を言語化し振り返り、他のユースワーカーと共有していた。この過程を経て、実践を批判的に捉えると同時に絶えず改良を行い、活動を行なっていく上での困難を解きほぐす手がかりになるとしている（井上 2016：16）。だが実際の「振り返り」の過程において、活動を行うユースワーカーからどのような点が課題として表明され、どのように困難が解きほぐされていくのか、その実態は明らかとされていない。

今後も子どもたちに関わるボランティア活動は増加することが見込まれ、個人に関わり方の裁量が与えられた活動に向けられる期待感も一層高まるだろう。だからこそ、ボランティアたちが活動に継続して臨めるよう、彼らが活動を行う中で何

を経験し、何を感じているのか、そして活動の中で困難を感じた場合、振り返りを行う場がその困難をどのように解きほぐしているのかを明らかにし、考察する必要があると考えた。

したがって本研究の目的は、子どもたちへの関わり方の裁量を与えられたボランティアが、活動を行う中での経験や感じていることを明らかにし、ボランティアが継続的に活動を行っていくためのサポートについて考察することである。特に、ボランティア個人が子どもたちとの関わり方をどのように設定しているのか、そしてその設定においてボランティア同士で活動を振り返る場がどのような影響を与えているのかに注目する。

2．調査概要

研究方法として、子どもたちに関わるボランティアの養成を行っているNPO法人X（以下、X）を調査対象団体とし、インタビュー調査を実施した。

Xを選定した理由は、第一にボランティアたちが子ども[1)]たちとの関わりにおいて裁量を持って活動を行っている点、第二にXがボランティアを養成する研修の過程において「ゼミ」と呼ばれる活動を省察するグループワークを行っている点である。本研究はボランティア個人がどのように活動を行っているかと同時に、ボランティア同士で活動を振り返る場での経験に注目している。Xのボランティアたちの実践を通じ、活動を行う上での経験やその中で感じていることを、個人として何を感じたか、そしてボランティア同士で共有する場を経てどのように変化したか、2つの視点から捉えることができるのではないかと考えた。

インタビューは2017年8月から9月にかけて2種類実施した。インタビューは双方1対1の個別面接の形式で、時間は1人1時間から2時間、話に合わせて質問の順番や聞き方を変えている。また、事前に録音の許可をいただき、後日書き起こしを行っている。

（1）ボランティア養成者に対するインタビュー

Xの常勤スタッフH氏に対しXの団体概要とボランティアの活動背景および支援者像を理解する目的で実施した。質問項目は、Xの活動について（立ち上げ背景、活動領域、活動期間、活動頻度、連携機関とそのきっかけ）、関わる子どもたちについて（人数と学年、関わるきっかけ、ボランティアとの関わりの内容）、ボランティアの養成について（求めるスキルと研修やゼミの内容）である。なお、Hと筆者はかつて同じ学習支援ボランティアに参加しており、インタビュー以前より関係があった。

（2）ボランティアに対するインタビュー

研修を修了し活動を行うボランティア14名に対し、Hを介して依頼を行い、承諾を得た男女7名に実施した。なお、依頼を行った2017年8月の時点で研修を修了していないボランティアは本研究の調査対象者として設定していない。7名の基本属性については、表1にまとめている。ボランティアが活動の中で何を経験したかを明らかにする目的で実施し、質問項目は、基本属性（性別、年齢、職業、過去の活動経験）、活動について（参加動機、参加した活動、参加頻度、関わった子どもたちの人数や学年、研修の内容や学び等）、子どもたちとの関わりについて（活動内外での関わり、話したことや一緒に行ったこと、それに至るまでの過程、関わる中での気づき等）を設定した。

以降、【　】は筆者の語り、（　）は筆者が内容を補った部分、……は省略部分という表記で統一している。

表1　調査対象者であるボランティアの基本属性

ID	性別	年齢	職業	活動期間
A	女性	20代前半	大学生	2017年1月－
B	女性	20代前半	大学生	2017年1月－
C	男性	30代前半	公務員	2016年6月－
D	男性	20代前半	大学生	2016年7月－
E	女性	10代後半	大学生	2016年7月－
F	女性	20代前半	NPOスタッフ	2017年1月－
G	女性	20代後半	保育士	2016年6月－

※ボランティアたちの大学における専攻は様々である。

3．NPO 法人 X について

（1）活動概要

X は子どもたちが貧困や虐待、いじめといった困難を抱えながらも支援から漏れ落ちている現状に問題意識を持ち、子どもたち地域から孤立させない仕組みを作ることを目的とし 2016 年に設立された NPO 法人である。メイン事業として子どもたちに関わるボランティアの養成を行っており、地域行政や自治体と連携し活動を行っている。

具体的な活動内容と、活動を行っている地域の概要について表 2 と表 3 にまとめた。なお、便宜上、子どもたちは誰でも参加可能な活動を「集団」、勉強会など同じニーズを持った子どもたちが集う小規模な場を「個別」と分類している。また、表に示した以外にも、自治体や連携機関からの紹介を受けた場合や、集団の場に来ていた子どもたちから課題やニーズが挙がった場合などに、X のボランティアがメンターのように個別で関わりを持つ活動も適宜行われる。X が現在活動で関わっている子どもたちの年齢層は小中学生から青年期の若者と幅広く、X 全体で関わった子どもの数は 2016 年度で約 230 名であった。

（2）ボランティア

X のボランティアは公募され選考の後、4 ヶ月の研修を含む 1 年間の任期の中で様々な活動に参加する。参加する活動や関わる子どもの人数はボランティアの希望や状況、現場のニーズ等に合わせて様々であり、また任期終了後継続して活動に参加することが可能である。

活動においてボランティアに期待される役割は大きく 3 つあり、子ども達に関わり、信頼できる関係を構築すること、子どもたちの課題やニーズに気づくこと、子どもたちを多様な支援や機会に繋げること、である。その達成に向け、4 ヶ月の研修は、知識の獲得を目的とした講座、実際の活動への参加、ゼミ、で構成されている。

研修の目的は、子どもたちの思いや背景を捉えられるようになることであり、そこで重視されているのがゼミである。ゼミはボランティアが自身の考え方の癖や価値判断を覚知する場であり、それらから一歩離れ子どもたちと関ろうと努めるようになることを目的としている。具体的内容として、ボランティアは実際の活動に参加し、子どもたちと話したことや自身が考えたこと、服装や表情等、五感で得た情報を記録し、後日ゼミで共有する。ゼミはボランティアと福祉や医学の専門性を有した X のスタッフも参加する。ゼミにおいて何故自身はそのように捉えたかという仮説と考察を共有することで、「自身はこう考えたが他者からはどう見えるか」について理解を深める。

ゼミを重視する意図として、継続して関わりを捉え直すことを重視している点が挙げられる。H は自身の関わりを共有することで多角的に実践を捉えようとする試みがゼミという場において継続的に行われることで、「文化」として癖付けされることを期待していた。

> H：（ボランティア）みんながみんな信頼関係を築けるようになって欲しいなとは思っている。その時にやっぱり（子どもたちの）奥底にある何かを知れるかが重要になってくるのだけれど、自分の思考とか判断とかが邪魔するから、とにかく自分を客観的に見られるようになる癖づけを、この 4 ヶ月では徹底的にする。【4 ヶ月の研修で癖づけされますか？】うーんまぁそこはそんなに思っても無いけれど、それをやり続けるコミュニティにしていかなきゃいけないから。あとは文化だね。そういったものは大きいかなと思う。【文化っていうのは？】X の持っている「このコミュニティに所属していると勝手にそんな感じになる」みたいな。例えば価値観を押しつけたりしないとか判断をしないとかそういうのは暗黙的にみんなやるし、うちらもよく言っているから。なんとなくそういう空気感でてくる。そういうものは大事になるんだろうね。

4．子どもたちとの関わり

では、実際にどのような活動が行われているのか、インタビューを行ったボランティアたちの語

表2　NPO 法人 X の活動一覧

地区	形態	活動名	概要	場所	頻度	ボランティアの人数	子ども	活動主体	連携機関	期待されるボランティアの関わり	備考
P区	個別	P-1	不登校の子どもの家を訪問し、関わる。子どもたちが人とコミュニケーションを取ることへの抵抗感を減らすことを目的としている。	各家庭	多くて週1回、平均月2回。	5人（各家庭に1人）	小学校低学年から高校生まで15人。半分以上が小中学生。男子が多い。	P区	教育委員会、スクールソーシャルワーカー	話したりテレビゲームをしたりと、ゆるやかに関わる。	子どもたちが他のイベントへ参加するようになると、家庭訪問の必要はなくなる。状態改善が見られ、最近は減っている。
	集団	P-2	教育委員会が実施している。不登校の子が来ると出席扱いになる。勉強したり運動をしたり一緒に好きなことをして過ごす。	区内施設	月2	約5人	小学校低学年から高校生まで15人。半分以上が小中学生。男子が多い。	P区	教育委員会	緩やかに関わる。話す中で表出されたニーズを拾い、必要に応じて別の活動に結びつける。	不登校の子どもたちの多くがゲームへの関心が高いことに気づき、体験学習の場でゲーム制作を実施する着想を得た。
		P-3	中高生対象の児童館。スポーツやバンド活動なども行うことができる。	区内児童館	週2	約5人	中高生約30人、男子がやや多い。	P区	P区子ども課、子ども家庭支援センター	来館している子どもたちの中に入り、スポーツを楽しんだり話しをしたりする。気になる子には別の支援に繋げたり個別でフォローを行う。	18歳以降は来館することができないため、センター職員も、かねてより継続した関わりへ葛藤を感じていた。ボランティアが関わることを歓迎しており、密な連携を図っている。
		P-4	子どもたちがやってみたいことに取り組める空間。ゲーム制作や映画制作を行う。進路や就職に悩んでいる子もいるので、子どもたちの興味がある分野で働く大人をロールモデルとして繋げる。	企業の本社ビル	月1	8人	中高生約20人。	NPO法人X	地元企業 P区子ども課 中高生センター 教育委員会	一緒にイベントに参加し楽しむ。子どもたちの様子を観察し、気になる子には声をかける。	特に不登校の子が、次々とこの場に来て大きく状況改善した。驚いたスクールソーシャルワーカーから随時不登校の子を見て欲しいという依頼が来るようになった。
Q区	集団	Q-1	トランプやテレビゲーム、ボードゲームやおにごっこなどの遊びや、学習支援。子どもたちのニーズに応じた活動を行う。	区内施設	月2	約5人	小学校高学年から高校生まで約30人。男女比は半々。	民生委員	民生委員	一緒に遊ぶ、話す、勉強するなど自由な関わりを展開している。気になる子には個別に関わる。	「ボランティアの登竜門」とHは述べており、活動を開始したボランティアはまずこの場に参加することが多い。
		Q-2	体育館でスポーツをする。	区内施設	不定期開催	約5人	中高生約10人。	NPO法人X	社会福祉協議会 一般企業	子どもたちの集団の中に入り、一緒にスポーツを楽しむ、話す。	大きなレストランなども併設されており、地域から活用を期待されている。
		Q-3	料理を振る舞いたい大人が集まり、子どもたちと一緒に料理をする。	一軒家	月2	約5人	中高生約10人。	NPO法人X	社会福祉協議会	子どもたちの集団の中に入り、一緒に料理を楽しむ、話す。	今後は緊急時は宿泊できるようなシェルターの機能を持たせたい。
その他	個別	R-1	10代の母親が集い一緒に食事を作り、話しをする等自由に過ごすことができる。	古民家	月2、3。状況に応じて個別で会う。	3人	多くて8、9人の10代の母親。個別で密に関わっているのは2人。	NPO法人X	保健所 子ども家庭支援センター 妊娠に関する相談機関	古民家での関わりはもちろん、母親と個別で連絡を取り就労支援への同行やファミレス等で会うこともある。	子どもたちが幼いこともあり、実際には古民家に来ることができない場合も多い。
		R-2	女子中高生を対象にした居場所事業。ゲーム、料理、話す等自由に過ごすことができ、人と繋がることができる。	毎回部屋を借りている。	月1	1人	中高生女子概ね3人、最高6人。	NPO法人X	−	学校や家庭とは違うコミュニティを提供する。勉強や遊びを通じ、継続的に関わる。	今後はどこか古民家を借りるなど決められた場所で行いたいと考えている。
		R-3	高卒認定試験合格を目指し勉強する。	Xの事務所	週1	2人	中退等を理由に、高卒認定試験受験を希望している約5人。	NPO法人X	−	一対一で子どもたちの勉強をサポートする。	勉強に臨むことが難しい子もいるため、適宜状況に合わせてニーズを満たせるよう努めている。
	集団	R-4	ゲームクリエイター等を講師に招き、ゲームづくりや様々な機会を提供する。	Xの事務所	月1	8人	10〜15人の小学生から高校生。不登校や発達障害の子も含む。	NPO法人X	一般企業	子どもたちの中に入り一緒にゲームをつくる。できるだけマンツーマンで子どもたちに関わるよう努めている。	P-4が人気のイベントであったため拠点を増やし実施しているが、P区の体験の場に来ている子がここにも来ることがある。

※インタビューを実施した2017年9月時点での情報を元に筆者作成。
※その他、Xに対し関わって欲しいという個別の依頼や相談が来る場合もある。
※時間外において、SNS等のツールを利用したコミュニケーション、個別で会う等の関わりを行っている。
※活動は、既存の活動にXが参入している場合とXが立ち上げた場合があり、「活動主体」は事業を立ち上げた活動の責任主体を指す。

表3　NPO法人Xが活動を行う地域の詳細

	P区	Q区	その他
参入経緯	周辺地域と比較し困窮度合いの高さが指摘されているが、かねてより地域に根付いたNPOと行政が連携し活動に力を注いでおり、双方意欲的である。	・周辺地域と比較し困窮度合いが高く、民生委員が力を持って活動している。行政も問題意識と取り組みへの意欲を持ち、幾度と委託事業等を試みながらも、活動が根付きにくく継続しないことに苦慮していた。 ・子どもたちにとって親世代とも言える民生委員のみでは活動内容に限界があること、そして学習支援等で若者が子どもたちに関わって欲しいというニーズが挙がっていた。	・P区およびQ区を基盤に活動を行っていく中で、別の地域から子どもたちが流れてきていた。近隣区域も同様に課題を抱えていることが窺えた。 ・個別で関わって欲しいと紹介され介入されることが増えた。
現状	活動にあたり、XはP区ビジョンの共有と実践と成果を積み重ね、連携に至る。特にかねてから中高生に関わる活動を行っていた行政職員からは、子どもたちの話を聞き一緒に何かやりたいことに挑戦するボランティアの存在は、必要だと感じながらも実現できていなかったものとして歓迎された。	・思いっきり遊び且つ勉強も見てくれる大人の存在がひとつの提供できる価値となっている。 ・活動し実績をつくり、地域で認知されるようになっている。	地域に根ざしての展開は現段階としては未定である。
連携先	教育委員会、スクールソーシャルワーカー、区行政子ども課、地元企業	民生委員、社会福祉協議会、地元企業	保健所、子ども家庭支援センター、子どもたちに関わる一般社団法人等の機関、一般企業、等

りを元に明らかにしていく。今回インタビューを行ったボランティア7名の活動動機と、参加した活動を表4にまとめた。

本研究は子どもたちへの関わり方の裁量が与えられたボランティアの経験や感じたこと、そして活動をボランティア同士で振り返る場での経験に注目している。そこで、インタビューを(1)ボランティアたちが行った活動、(2)ボランティアが活動の中で感じたこと、(3)ゼミでの経験、の3点でまとめる。

(1) ボランティアたちが行った活動

Xのボランティアに期待されることとして、信頼できる関係を構築すること、課題やニーズに気づくこと、多様な支援や機会に繋げること、が挙げられていた。具体的な実践として、まず子どもたちが何に関心を寄せているかに注目し、好きなことを切り口に関わりを深めていた。個別の活動に参加し子どもと関わったFは、好きな話題に注目し話すことで関係を構築したことを述べた。

> F:【全然話せない状況からからどうやって関係つくったんですか?】好きなものをきっかけに。……音楽とかスポーツとか、好きな選手の動画一生懸命見てみたり。私も格闘技が嫌いじゃないっていうのもあって、そういう話をしたりとか。好きな音楽一緒に聞いたりとか調べたりとかしました。そしたら結構話せるようになりました。なんなら恋バナとかするようになった。

集団の場に参加していたAからも、スポーツやゲームの話題を切り口に「会話するまでの関係」になったことを述べた。関係構築を図る上での切り口については、子どもの人数に関わらず同様であった。

表４　調査対象者の活動経験と参加動機

ID	ボランティアになる以前の活動経験	X への志望動機	参加した主な活動
A	児童相談所 養育家庭の家庭教師 メンター・プログラムに ３年目ボランティア	児童相談所やメンターとしての活動の中で、カバーしきれていない子どもがいるのではないかと問題意識を持った。自身が理想としているあたたかい関わりが X ならできると感じた。	P-3 Q-1 R-1
B	学習支援に 2ヶ月間ボランティア	自身の家庭背景から里親に興味を持ち、理解すると同時に企画を行いたい。ゼミなどの後ろ盾があることに魅力を感じた。	P-2 P-3 Q-1 R-2
C	無し	独学で得たキャリアカウンセラーの資格を活かしたボランティア活動を行いたい。寄り添うという理念に共感した。	P-3 Q-1 R-3
D	学習支援に ３年間ボランティア	参加していた学習支援において、課題が見えたとしても活動外で対応できないことにジレンマを感じた。積極的に子どもたちと何かつくりあげる活動ができることに魅力を感じた。	P-4 Q-1 Q-2 R-1 R-2
E	無し	自身の困難体験より、「人のために生きることが私の意味」だと捉え、24 時間いつでもかけこめる場所をつくる夢を持った。子どもたちへの対応の仕方と継続的な関わりの実践経験を積みたいと考えた。	P-4 Q-1 Q-2 R-1 R-2
F	学習支援、キャリア教育等に ２年間ボランティア	参加していたボランティアにおいて、関係が構築できたにも関わらず短期間で関わりが終わってしまうことにジレンマを感じた。長期的な関わりを掲げている X の活動に魅力を感じた。	R-3
G	児童養護施設で １年間アルバイト	かねてより 10 代の母親の手助けをしたいと考え X の活動に共感した。仲間や相談相手がいることに魅力を感じた。	R-1

※主な活動は複数回参加している活動を指しており、上記以外の活動にも参加経験がある。

A：最近やっているのは、卓球をひたすら教えてもらうってことです。……卓球やろうって声かけて、壊滅的なところから教えてもらうって感じです。【それ仲良くなれます？】ちょっと人見知りの子とかはそれを介して会話するまでの関係築けたりとか、カードゲームでもいいんですけど。遊びが前提にあるっていうのは良いですよね。

関係を構築していく上で意識していることとして、同時に友人関係で培った感覚を活かし「自分が楽なキャラクター」で関わっていることが述べられた。また、「それを受け容れてくれないことってない」と述べていることから、支援者の立場でありながら友人としての感覚を持ち、自身もまた受け容れられる存在であるという相互的な信頼感がその実践を支えていることがうかがえる。

A：P-３とかの集団の場にいる時はあんまり自分のキャラクターを作ろうと思っていなくて……基本的には自分が楽なキャラクターで、それを受入れてくれないことってないと思うんですよね、歳が近いっていうのもあるし。こういうグループと仲良くなる時はこういう会話をするっていう、今まで自分が友達とやってきた経験があるから、

ちょっとこれは聞く側がいいなとか、つっこむ立場がいいなとか、ぼけるよりは……って。

個別の活動においても、友人としての感覚を持ち関わっていることが個別と集団の双方の活動に携わるDから述べられた。さらに個別の一対一の活動においては集団の場と異なり、子どもたちのニーズに合わせた柔軟な関わりが可能であり、それを「相手のことを知る」「思ったことを吐き出す」ための過程であると捉えていた。

D：相談が出てくるって、信頼関係ができてなければ無理じゃないですか。僕、信頼関係を生むために相手のことをすごく知る必要もあるし、たくさん思ったことを吐き出す必要があると思った。だから、個人で関わっていた子とかは、炎天下の中一緒にゲームやったりしました。その後一緒に買い出しに行ってスポーツ大会に参加するとか。だから（子どもたちと）ごはんとかも行きますけど、あんまり目的のないこともする。【目的はないけどとりあえずやりたいって感じですか】そう、やりたいならじゃあやろう、みたいな。ちょっとした友達感覚ですよね。僕それがいいかなぁって思って。

関わりを深めていく中で、子どもたちの困難はどのように表出されていくのだろうか。集団の活動に携わるBの語りからうかがえることは、子どもたちから課題が表出されたとしても、それを課題として捉えるべきか曖昧さを伴っているというものである。これにより子どもたちが自身の困難を表出できたとしても支援に繋がらないことが推察される。

B：【お金ないっていうのは、困りごとというか愚痴というか、どっちもあると思うんですけどそういう話しをするときってどういう雰囲気なんですか？】それは「今お金なくてちょー辛い」みたいな。「ハァー」「まじ辛いわー」ぐらいのテンション、ノリでしたね。【お金ないって言われた時なんて言ったんですか？】「何に使っているの？」とか「え、なんでー？」とか。そういうと大体「遊んじゃう」とか言ってオイってなる。

子どもたちから課題とも捉えられる内容が語られた場合、ボランティアたちはどのように対応しているのだろうか。集団の活動に関わるCは、「違和感のない程度に深掘りしていく」ことを意図していた。注目すべきは、課題の有無を問わずその関わりを行っているという点である。ボランティアは子どもたちを多様な機会や支援に繋げる役割を担うことが期待されているが、あくまで友人としての感覚を重視しているようである。

C：（子どもたちに対し何か気になることがあっても）関わり方は基本変えないようにします。敏感なので彼ら。……気になるキーワードがあったら、違和感のない程度に深掘りしていくっていうのはありますけど、それって別に課題ない子もやっているので。何かわかったから特別に関わり方は変えないですけど、ある程度集中力は変えるかもしれません。

個別の関わりにおいてはどうであろうか。集団と個別の双方の活動に携わったDは、子どもたちとの関わりの中で気になった話題について、「ポロッと出た時」に深掘りしていくことを述べ、それを「自然な関わり」であると捉えていた。集団の活動に携わるCと同様、友人としての感覚を重視すると共に子どもたち自身の口から語られることを待つ姿勢がうかがえる。

D：「おす！元気？今日なにする？」みたいに話をしていって、「最近学校どうなの？」って聞いてみて、なんか出てきたらそこの話に乗ってあげる……元気なのに「最近なんか重いことあった？」って聞くのって変じゃないですか。だからポロっと出た時に「それって何なの？」って聞いてみる。それが自然な関わりだと思うので、顔色とか様子伺ったりします。

（2）活動の中で感じたこと

ボランティアたちは支援者としての立場でありながら、友人のような立場をも意識し、活動を行っていた。では、その中でどのような思いを持っているのか。

まず集団の活動に参加したBから、「深い話をするのは難しい」と感じたことが語られた。すなわち、集団の活動は関わりを深める友人としての立場上は好都合であるとしながらも、課題やニーズに気づく支援者としての役割を担う上では難しさを伴っていると認識していた。

B：【P-3って、会って「卓球するかぁ」ってなるような、緩い発散場なんですかね】そうですね、遊び場って感じです。……なので深い話をするところまで行くのは難しい居場所だなって思います。

では、個別の活動ではどうであろうか。個別の活動は集団の活動よりも、子どもひとりに対し費やすことができる時間が長い。関係を深める機会も増えることが推測される。しかし、個別の活動に携わったFから語られたのは、関わりを深めることに対し恐れを感じたというものであった。具体的には「行動するべき」と思いながらも、「会うことを恐れていた」と述べていた。活動時間外に会う等手段として関わりを深めることが可能であったとしても、実際には葛藤を感じ実質的に選び取ることのできる選択肢となりえていない難しさが表われている。

F：（関わっている子と、活動の）時間以外で会うことを自分は恐れていたんですよ。……自分はそれ（子どもが求めてきたこと）をちゃんと受入れられるのだろうかっていう葛藤があって。自分が先に疲れそう、もういいよって思ってしまいそうで、外で会うのを結構抑えていたなって。でもそれってボランティアっていう役割で言ったら、本当は行動するべきって分かっていたけれども、自分の中で恐れていた。受入れられるのだろうかっていうのがあって。

Fと同じく個別の活動にも携わるEからは、対面できない間も関係性を維持することを意図して毎日連絡を取り合っていること、それに対して大変さを感じながらも必要であると認識していることが語られた。個人に裁量が与えられ、どこまで関わるかの枠組みをボランティア自身で設定できるからこそ、決断に対し迷いが生じる様子がうかがえる。

E：（子どもたちにとって、困った時に何か相談できる）対象になる大人って、日常的に会話している人とか、日常的に相談している人とか、だからこそ言えるっていうのが大きいような気がして。なので、そういうR-2に来てくれている子たちとも、場に来たときだけの関わりじゃなくて、連絡もほぼみんなと毎日とっているんですよ。返事遅いとか言われるんですけど。学校のこととか話すことによって、話しやすくなるというか、何かあった時に相談できる関係性を築いていこうって私は思っているので。やっぱり密は大変ですけど、それが必要かなって思っています。

迷いが生じながらも活動を止めないボランティアたちは、どのような思いに動機付けられているのだろうか。まず10代の母親と個別の関わりを行っているGからは、「幸せって思って生きていけることが大事」と捉えていることが語られた。その思いは将来を見据えた機会に繋げたいという思いと相容れず、迷いともなっているようである。

G：【関わっている子と「勉強とかしない？」みたいな話しはしたりするんですか？】勉強のことはしてないですね。私自身そういう思いがありつつも、この子たちが幸せって思って生きていけることが大事だろうなと思っていて。もちろん仕事とかお金とかそれぞれ幸せに暮らせるってのは思うんですけれど、今の時点でそれを強いたりするのは時期としてはどうなんだろうって。だからどう

しようかなぁってところです。

同じく個別の活動において高卒認定試験に向けた学習支援を行っているFも、今のニーズを満たすことと、将来に向けて勉強に取り組むことのバランスに難しさを感じていた。「信頼関係築けると話したいことってどんどん出てくる」と認識しており、信頼されていると感じ、その思いに応えたいからこそ、迷いを感じていることがうかがえる。

F：結構無理矢理勉強のプリント出したりとか、今日は話を聞くことに徹しようとか、とりあえず話している中プリント出したりとか、時間決めてやってみたりとか、最悪ここでは話すだけ話して家でプリントやってきてとか、色々試しました。でもどうすればいいか結論は出ませんでした。それは他の活動でも思うんですけれど、勉強するとか作業するとか、時間決めても信頼関係築けると話したいことってどんどん出てくる。だから簡単に学習を強制できなくなるっていうのがありますね。

別の観点から、Dが活動の中で迷いを感じた場面の背景には、自身の実体験があることを述べていた。関わる子どもに自身の体験を重ねてしまい客観視が難しい状況に陥り、辛いと感じていた。しかし、同時に自身の体験を振り返り、辛いと感じた経験の捉え直しを図っていた。Hは研修で重視していたのは、自身を客観視し価値判断から離れることであると述べていたが、事象そのものの是非から離れ、何故それが起こっているのかに意識を向けることで、辛さそのものよりも本質を問うことに繋がっているのではないか。

D：（ボランティアとして活動を始めた頃の関わりは）自分の範疇で決めてしまう、それやっちゃだめでしょう、NGだよ、みたいな。【何がNGでした？】煙草とか、酒とか、自分のやっていた自傷もそうだし。あんまり大きな声では言えないですけど、自分でそれを解放できるのであればある程度は許せるのかなぁって。自分らしくあるためにどうするんだろうって。特に自傷とか、僕がそうだったんですけど、親に自傷やっていたって言った時に、「あなたじゃあ精神科行かなきゃ」って。その関わりってうわぁって思ったんです。僕も最初そうで、自傷＝精神科みたいな。何にも知らずに、そういう状態に陥った原因とか、なんでそれが起きたのかっていうのを、知らずにそういうことを言われた自分って悲しかったり辛かったりとかしたことがあって。それが結構吹っ切れたきっかけでした。当時の自分にとっては自傷っていうのは自分を守る手段だった。何か吐き出したいものがたくさんあるけど吐き出せないみたいなことが身体の中で起きてしまって、そういうことが起きているっていうのがあったと個人的には思っているので。それを社会的判断で見ちゃうと、自傷＝ダメみたいになってしまって。それは辛いなと。そういうものがどんどん外れていった感じでした。

（3）ゼミでの経験

最後にゼミでの経験についてである。ボランティアは自身の関わりを他のボランティアに共有し、ボランティア同士で関わりを振り返ることを通じ、何を経験しているのだろうか。

個別の活動に携わったFは、子どもと関わる中で自身が「やばい」と感じた場面をゼミで共有した際、他者から何故そう思うのかを問われ、根底に自分の価値観があると覚知するに至ったことを述べた。Fの感じた「やばい」という価値判断が、関わる子どもが何故その言葉を使うのか、その言葉を使うことがどのような影響を及ぼすのか、という点まで考察することを阻んでおり、Hが述べていた「子どもたちの奥底にある何かを知る」ことを妨げていたと推察される。

F：【外された価値観ってどんなものだったんですか？】私だったら例えば関わっていた子が久しぶりを「さしぶり」って言うんです。わかってやっているのか、わかってないでやっているのか、よ

くわからないなって思って。……それやばいなって思って（ゼミで）話したら、「それなんでヤバイと思うの？」「別に今困ってないんだったらいいんじゃない？」って言われて、私は「それ常識だからやばい」って思っていたけれど「それって自分の価値観だよね」って話になって。そういう話になることは多かったです。漢字が読めないとか、喧嘩ふっかけに行ったり。それって大人になった今でもやるってやばくないですか？って言ったら「なんでそんな風に思うの？」「それの何がやばいの？」って。それさえも自分の価値観なんだなぁってもやもやしました

自身の価値判断から離れることについて、集団の活動に携わったBは参加した活動において子どもとの関わりがうまくいかないと感じた際、専門性を持ったスタッフから転移について説明を受け「軽く考えられるようになった」と述べている。子どもたちの抱える困難は複雑さを伴うことも予想されるからこそ、専門的な観点から意見を得ることは、背景を理解するひとつの手がかりとなりうるのではないか。

B：この子なんで（話が）噛み合わないんだろう、なんでこんなつめたいんだろうなっていう女の子がいて……っていう話を（ゼミで）した時に「あなたはなんとも思っていなくても、例えば仲悪いお姉ちゃんに似ているとか、嫌いな先生に似ているとかで、転移している場合があるから大丈夫だよ、どうしても転移して噛み合わないことはあるから……って話しされて。そこはちょっと軽く考えられるようになったというか。

困難を感じた場面の切り開きについて、個別の関わりを行っていたGも、活動においてうまくいかないと感じている場面についてゼミでの共有を経て「自分が悪かった」という考えから離れ、相手の立場から状況を捉えられるようになったことを語った。個人に裁量が与えられた活動は、裁量を持った個人に活動や事象の責任が問われる分、設定した枠組みに対する責任感も重くなりかねない。しかし、子どもたちの人数に関わらず、重要なのは自身を客観視し、子どもたちの背景に意識を向ける実践であった。

G：（関わる子どもが）少数だからどっぷりで、ひとり（連絡が）返ってこないだけで悩んじゃう……そもそも別に返ってこないからってダメではないというか。単純にその子が連絡する動機が無いってだけで、自分が悪いとかじゃない、相手の状況から考えてみるとか、そっちが忙しいとか、勉強がちょっと嫌とか、だから私もどっぷりつかり過ぎちゃったんだなって。私結構悩むとき「自分がダメだった」って思いがちなんですけど、そうじゃなくてもっと相手の状況に立って考えると「ああ私だったら連絡しないな」とか考えられるようになりました

しかしながら、子どもたちの背景を理解する試みだけでは、やはりその認識や判断が正しいかどうか不安になる。だからこそ、ゼミという自身の経験を共有し他者の意見を得ることができる場で、ボランティアは安心感を得ているようである。具体的場面として、個別で子どもたちと関わっていたFから、ゼミという場で自身の関わりを共有することを通じ「間違っていない」と捉えられるようになり、安心感を得たことが語られた。

F：【（自身の関わりにおいて）思い込みすぎとかよくやっているよって言われた時どう思いました？】人から評価っていう面で、私は人より評価して欲しい思いが強いから嬉しかった。あと安心したっていうのも大きかったように思う。嬉しかったり安心した、間違ってないんだって。間違うことに対する恐怖が自分の中にすごくあるんだなってことに気づきました。

5．まとめと考察

本研究の目的は、子どもたちへの関わり方の裁

量が与えられたボランティアが活動を行う中での経験や感じていることを明らかにし、継続的に活動を行っていくためのサポートについて考察することであった。具体的研究方法として、NPO 法人 X において子どもたちへの関わり方の裁量が与えられ活動を行うボランティア 7 名へのインタビュー調査を実施した。

最後に研究の目的として提示した(1)ボランティアが関わり方の裁量が与えられた活動の中で経験し感じていること、そして(2)ボランティアが継続的に活動を行なっていくためのサポート、の 2 点からまとめと考察を行う。

(1) ボランティアが関わり方の裁量が与えられた活動の中で経験し感じていること

X のボランティアは子どもたちと関係を構築する、子どもたちの課題やニーズに気づく、子どもたちを多様な支援へ繋げる、という 3 つの役割が期待されていた。ボランティアたちの語りから、関係を構築していく上で自然体であることが意識されており、自身が友人と関係を深めていった経験が活きているとも述べている。対して、子どもたちの課題に「気づいてあげられない」と感じていること、行動すべきと感じていながらもできずにもどかしさを感じていることなどが語られ、支援者としての関わりを行っていく上では迷いを感じたことも述べられた。

この迷いの背景には、ボランティアたちは専門性を有しておらず、支援者としてどのように関わるべきか参照できる知見が不足していることが想定される。また､先行研究で示唆されていた通り、子どもたちの困難は見えにくさを伴う。たしかにボランティアは子どもたちとの関わり方について、裁量次第でどこまでも子どもたちとの関係構築に注力することができる。関わりを深めるからこそ見えてくる子どもたちの課題もあるだろう。しかし、子どもたちの課題の深刻さによってはどこまで関わるべきか判断そのものに迷いと不安が生じる。このような状況では、ボランティア個人が子どもたちとの関わり方に対し裁量を持っていたとしても、実質的に活かすことができないのではないか。

(2) ボランティアが継続的に活動を行なっていくためのサポート

X では子どもたちとの関わりを記録し、後日他のボランティア同士で共有する「ゼミ」と呼ばれる場が研修として設定されていた。このゼミと呼ばれる場について、自身を客観視することを通じて価値観を押しつけない癖を付けることにボランティア同士で取り組むことを意図していた。そして、X ではその癖付けを「文化」と呼び、重視していた。

イギリスのユースワーカーに関する先行研究では、活動を振り返ることが困難を解きほぐす手がかりとなると示唆されていた。ボランティアたちからも、安心感を得ていることが述べられた。その背景には、ボランティアたちにとってゼミは関わりに対する他者からの視点を得ることができる場として捉えられていたことが挙げられる。関わりに正解や不正解はないからこそ、他者の視点を取り入れながら考察を深め合うことができ、結果として「間違っていない」という安心感に繋がっているのではないか。

関わり方の裁量を持ったボランティアは、活動に臨む中で多くのことを経験し、その経験に基づき関わりの深さや範囲を自ら定め、活動を行なっていく。第三者が話を聞き、アドバイスをすることももちろん重要である。しかし、関わり方の裁量を持っているのはあくまでボランティア自身であることを忘れてはならない。サポートする観点から重要なのは、ボランティアが感じた不安や悩みそのものを取り除くことよりも、ボランティアが自らの裁量を持って困難を脱することができる機会や場を作ることではないだろうか。

近年子どもたちに対するボランティア活動に注目が集まり、ボランティア個人が裁量を持ち子どもたちと関わる場も増加することが見込まれる。関わり方を定める裁量をボランティア個人が持つことで、今までアプローチすることができなかった子どもたちに対し、柔軟に関わり対応できるよ

うになることが期待される。しかし、確かに関わり方の裁量を持ち活動を行うのはボランティア個人であるが、「子どもたちのために何ができるか」考え実践を重ねる取り組みを、支援する個人のものとして留めないことが重要である。子どもたちの困難や課題は、一朝一夕で解決できるものではなく、また誰か一人の力で魔法のように改善できるものであることも少ない。何かひとつのやり方や、誰かひとりの実践に頼るのでは無く、子どもたちのために何ができるかを誰か個人に留めずに考えサポートしていくこと、そして時間を要してもじっくりと子どもたちと共に考えていくことができる「文化」を醸成していくことが重要なのではないか。

本研究の残された課題として、関わりは本来2者以上により成り立つものであるが、本研究は支援者であるボランティアの視点からのみ考察を行った点が挙げられる。子どもたちの視点からも実践を捉える更なる研究が求められる。また、本研究ではXを例にとった組織内での関係性を中心に考察を行ったが、他機関や地域との関係性、制度や社会システムといったより大きな枠組みにまで視野を広げた研究が重要であり、今後の課題としたい。

注

1）本来であればXが関わりを持っている青年期以降の子どもたちは「若者」「青少年」と呼ばれるが、Xの活動対象の中心層が中学生までの子どもたちであることをうけ、本研究では青年期以降の若者たちも含め「子ども」と表記している。

文献

井上慧真（2016）「イギリスにおけるユースワーカー養成に関する一考察：高等教育機関との関係を中心に」『教育・社会・文化：研究紀要』（16）、1-21

大澤真平（2008）「子どもの経験の不平等」『教育福祉研究』（14）、1-13

小西祐馬（2003）「貧困と子ども」青木紀編『現代社会の「見えない」貧困　生活保護受給母子世帯の現実』明石書店、85-109

林明子（2016）『生活保護世帯の子どものライフストーリー　貧困の世代的再生産』勁草書房

藤村まどか（2013）「貧困状況下における子どもの生活と主体性；子どもへのインタビュー調査の結果から」『教育福祉研究』（18）、41-52

（北海道大学大学院教育学院・修士課程修了）